

## 近藤雅之先生を送る

辻 隆（天文学教育研究センター）

近藤先生は1961年に本学の大学院博士課程の修了を待たずに当時の東京天文台に入られ、1960年10月に開所式を迎えたばかりの岡山天体物理観測所に出張され、同観測所創設期の困難な時期にその立ち上げに参加されました。筆者が大学院に入ったのは丁度近藤先生と入れ違いになりましたが、岡山観測所に観測に行くとしばしばお

目にかかる機会があったことを懐かしく思い出します。この岡山天体物理観測所は口径188センチの反射望遠鏡を持つ我が国で初めての近代的な天体物理観測を目的とする観測施設であり、当時は東洋一、世界的にも10指に入る大望遠鏡でした。近藤先生はここで主として分光観測装置の立ち上げを担当され、我が国で初めて導入された大型分

光器による本格的な天体分光の観測的基盤を整備する上で重要な寄与をされました。近藤先生ご自身もこれら分光器による観測を精力的に進められ、主として金属線星（Am 星）とよばれるある種の金属線スペクトルが異常を示し当時その原因は謎であった特異星のスペクトルを多数観測されました。

その後、近藤先生は三鷹の東京天文台に戻られて、これらの Am 星のスペクトルの解析を進められました。特に主星が Am 星で伴星が正常と思われる星からなる連星系を詳しく研究し Am 星に特有の化学組成の異常は伴星には見られないことを明らかにされ、さらにこれら Am 星の統計的解析にも研究を広げていかれました。また、近藤先生は岡山天体物理観測所で測光観測にも手を広げ、やはり Am 星の詳細な放射スペクトル分布を決定する研究を進められました。我が国の気象状況は分光観測はともかくとして安定した空が必要な測光観測には必ずしも適したものではありませんが、近藤先生はこのような困難な観測を我が国で行う上で先駆的な役割を果たされました。

さらに、1974 年にやはり当時の東京天文台に木曾シュミット観測所が完成し、世界第 4 位のシュミット望遠鏡が活動を開始しましたが、近藤先生はここでも紫外超過天体を探索するプロジェクトで大きな成果をあげられました。6 度四方の広視野を一度に観測できるシュミット望遠鏡により、木曾紫外超過天体（KUV）と名づけられた数千個の特異天体のデータベースを完成されました。また、1984 - 88 年の期間、近藤先生は東京天文台・堂平観測所の責任者としてその運営の任にあたられました。ここには口径 90 センチの反射望遠鏡がありますが、近藤先生はここで上記シュミット探査により発見された特異天体がどのような天体であるかを突き止めるために、これらの天体の測光観測を行うための新しいシステムを確立され、その後現在まで継続されている長期観測プロジェクトをお始めになりました。

1988 年 7 月には東京天文台が本理学部の天文

学教育研究センターと国立天文台とに改組されましたが、この際近藤先生は理学部に移られ同じく理学部の所属となった木曾観測所で前記紫外超過天体探査の研究をさらに発展させることにご尽力されました。実際、近藤先生はご定年の直前までほとんど毎月のように木曾観測所に出かけられ、観測及び今までに得られたデータの解析を精力的に進めておられました。さらにこのようにして発見された木曾紫外超過天体（KUV）の内特に興味があると思われる天体については、堂平観測所での測光観測や岡山天体物理観測所での分光観測を行い性質を明らかにする研究をすすめてられました。

1 月 24 日に行われた近藤先生の最終講義は“特異連星 KUV543 - 209”と題して行われましたが、ここで話題とされた天体もこのようにして詳しい追跡観測の行われた天体の一つです。近藤先生はこの天体の観測を長期にわたり行いこの天体が不規則な変光を示すことからこれが激変星と呼ばれる天体であることを示されました。激変星とは白色矮星と赤色矮星とが連星系をなし赤色矮星から流出したガスが白色矮星のまわりに降着円盤を形成している活動的な特異天体と考えられていますが、このような複雑な物理構造のためか、近藤先生による 10 年以上にわたる数 100 夜の観測データを周期解析にかけても通常の連星のようにははっきりした周期は現れず、非常に複雑な光度と色の不規則な変化を示すと言うことです。さらに詳しく調べるにはスペクトルの観測を行うことが必要ですが、この天体は 14 等級以下の暗い天体で、我が国の望遠鏡ではこのような観測はかなり難しいことを近藤先生は大変嘆いておられました。実際、近藤先生がその立ち上げにご尽力された岡山の我が国最大の望遠鏡はいまや東洋一でもなく世界的にみればごくありふれた小望遠鏡になってしまい、それを全国の研究者で共同利用しているため一つのプロジェク当りの観測時間はきわめて少ないという困難な状況になってしまいました。しかし、近藤先生はこのような状況のなかで、ご

自分で無数の天体のなかから未知の天体を発見しその本質を自ら究めていくという息の長い研究を続けられ、多くの成果をあげられました。このようなスタイルの研究はだんだんやり難くなっていく傾向にありますが、近藤先生がこのような姿勢を貫かれたことははなはだ敬服に値することだと思います。

このように、近藤先生は1960年代からようやく整備が進んだ岡山、堂平、木曾等我が国の光学赤外線天文学の主要な観測施設のすべてに深くかかわってこられました。思えば近藤先生がご活躍になったこの30年間は、我が国の光学赤外線天文学において観測施設がほとんど無の状態からよ

うやく自分達で必要な観測ができる状態になったという意味でその基礎を確立した重要な時期にあたります。そしてこれらの基礎の上に今やすでに始まった新しい大型光学赤外線望遠鏡の建設をはじめとして世界最高レベルをめざす次なる大きな飛躍の時にあります。まだまだご一緒に仕事をさせていただけると思っていましたが、ご定年を一つの区切りとして理学部を去られる事は大変残念なことです。大変な読書家でもあられる近藤先生はご定年後の自由な時間を楽しみにしておられることと思いますが、今までの貴重なご経験の蓄積を今後も天文学の発展に生かし、ますますご活躍下さいませようお祈りいたします。